

2017年7月16日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉師

聖書：Iサムエル1：1－20

タイトル：「心を注ぎだす祈り」

---

先日、子供達がひとつのおもちゃを取り合って喧嘩をしていました。事情を聴き、仲直りをさせ、ひとりの子へおもちゃを渡しました。しかしその子は、数分もしないうちにそのおもちゃで遊ぶのを辞めました。そして他のおもちゃで遊んでいました。

一つのおもちゃを巡って子供同士が泣きながら喧嘩をするほどだったのに、いざ自分の手に届いたときには、そのおもちゃで遊ばない…。ではいったい何が欲しかったのだろう？なぜ暴れたのだろ？と、思うことがあります。しかし私達も時に、『これが欲しい！』と凄く思っていたモノでも、実際手に入るとそうでもなかった…。ということもあるのでは？あるいは、その途中でやっぱりいらなくなる。などということがあります。案外人は、自分は本当には何が欲しいのか、あるいは自分自身には何が本当に必要なかを分かっていないことがあるように思います。求めてみたものの、実は違っていたということです。今日の聖書に出てくるハンナも同じようなことがありました。

さて、毎月第三週は「祈り」をテーマに、みことばを取り次がせていただいています。今回で三回目になります。先の二回では、はじめにソロモンの祈り(II歴代6-7章)を通して、私達が捧げる祈りは、何者よりも力がある比類なき神に対してであるということ、また約束を完全に成し遂げてくださる神に対してであるということ、そして時間も空間をも超越している遍在とまた臨在の神に対してであるということ、さらにはさばきと赦しの神に対してであった。ということでした。ソロモンはこの圧倒的なお方である神ご自身のことを良く理解して、それゆえ畏敬の思いを持って祈りを捧げました。同じように私達が捧げる祈りとは、まさにこの圧倒的な神に対してである。ということでした。

その次は、ルカの福音書18章からイエス様が「いつでも失望せずに祈りなさい」と教えてくださったところからでした。それは、義なる神は速やかに神の御心を求める者の祈りには、応えてくださる!ということでした。また、この祈りは、決して自分たちが求める一時的で単発的なことだけに対してではなく、祈りとは神の御心を求めて御国に至るまで捧げられるべきものである。ということでした。イエス様は私達に、そのように御心を求めて、御国に至るまで祈りを捧げなさい。と教えてくださいました。

三回目の本日はIサムエル1章から「心を注ぎだす祈り」と題して、ハンナを中心に、御言葉から確認していきたいと思います。

2vを見ると。

「エルカナには二人の妻があった。ひとりの妻の名はハンナ、もうひとりの妻の名はペニンナと言った。・・・」と記されてあります。当時のイスラエルでは一夫多妻制というものが当たり前のようになっていたようです。その背後には、さまざまなことがあって、女性がひとりでは生活できないので、一夫多妻制が生まれたとか、いろいろな言い分があったようです。しかし、もともとイスラエル民族は「神と人との一対一の人格的な交わりを土台」としているのです。そこには一夫一妻制というものを誰よりもこよりも純粋に神によって教えられてきた人々でありました。ですから、時代の流れだからということ

で、一夫多妻制を取り入れているというのは、それだけ彼らが自らの欲であったり、またそうした人の罪に溺れ、神の教えを歪曲していた。という背景を知ることが出来ます。

確かにこの時代、イスラエルは士師の時代、別名＝暗黒時代と呼ばれていました。サムエル記の前の士師記には、「めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」と繰り返し記されています。神の教えを守らずに、人が自分勝手に正しさを主張していくと、そこには当然いろんな問題が出てきます。だからこそこの時は暗黒時代と呼ばれていたのですが、現代もほとんど変わらないと思います。神の教えよりも自分の思い・考えが先になる。そういう時代です。「めいめいが自分の目に正しいと見えることを行っていた」という時代です。この世はそうであっても、私達には神のことば、聖書があります。御言葉に耳を傾けることを忘れないようにしなければなりません。

さて、一夫多妻という神の教えではなく、人の欲、またその罪からの決め事は必ず更なる問題を引き起します。エルカナの最初の妻であったハンナと第二婦人のペニンナの間にも、とても大きな問題がありました。その中心的な事というのが、祝福の問題です。

ハンナは、2節の最後に「ペニンナには子どもがあったが、ハンナには子どもがなかった」と、記されていることや、6節のところでも、「主がハンナの胎を閉じておられるというので、ハンナが気をもんでいる・・・」というところや、その後の多くの箇所からも分かるように、ハンナにとって「子供が居ない」ということが、彼女にとっての祝福の問題となっていました。

一方ペニンナは、5節の後半と6節に「彼がハンナを愛していたからである。彼女を憎むペニンナは・・・彼女をひどくいらだたせた」と記されているように、ペニンナにとっては、ハンナに向けられている夫エルカナの愛が彼女の祝福の問題となっていました。それゆえ、ペニンナは、夫から愛されているハンナをひどく苛立たせるようなことを言ったり、また行ったりしていた。ということです。続く7節を見ますと、「毎年、このようにして、彼女が主の宮に上って行くたびに、ペニンナは彼女をいらだたせた。そのためハンナは泣いて、食事をしようとしなかった。」と記されていますが、これは毎年訪れるシロでの礼拝の時が、いわばペニンナによるハンナいじめのクライマックスの時であった。ということです。すなわちハンナにとっては最も苦しい時でした。

なぜ、このシロでの礼拝の時が、ペニンナによるハンナいじめのクライマであり、ハンナにとって最もつらい時だったのかと言えば、このシロでの礼拝は、家族全員の行事であったので、ハンナひとりだけどこかに逃げることが出来なかったからです。普段はどこかほかのところへハンナは逃げていくこともできたでしょうが、ここではそうはいきませんでした。自分をいじめる嫌な人と一緒に居るとするのは本当につらいことですが、ハンナはどうしてもそこに居なければならなかったのです。また、4-5節を見ますと、「その日になると、エルカナはいけにえをささげ、妻のペニンナ、彼女のすべての息子、娘たちに、それぞれの受ける分を与えた。しかしハンナには特別の受け分を与えていた。…」と記されているように、神にささげたいけにえから、その人数に従ってそれぞれに受ける分を分配しました。つまり、子供のいないハンナにとっては、あのペニンナよりも目に見える形で、神から受ける分、すなわち祝福が少ないということに、自分はやはり神に祝福されていない者だという思いが、彼女の中に溢れていた。と考えることができます。そして、それを見ていたペニンナは、ここぞとばかりにさらにひどいことを言って苛立たせていた。ということなのでしょう。だから、このシロでの礼拝の時が、ハンナにとって、もっとも苛立つ時であり、また辛い時であり、そして神に祝福されていないと感じる、そういうクローズアッ

プされる時であった。ということだったのかもしれませんが。

夫のエルカナは、8節を見ますと「夫エルカナは彼女に言った。「ハンナ。なぜ、泣くのか。どうして、食べないのか。どうして、ふさいでいるのか。あなたにとって、私は十人の息子以上の者ではないのか。」と言って、男性目線での一方的な一応の慰めをしようとするのですが、ハンナには子供が与えられていない事実ということと、また自分には子供が居ないので、結局第二婦人のペニンナをも迎え入れて、そのペニンナにはたくさんの子供が与えられているではないか！という事実、またそうした矛盾する愛のカタチにも悩み悲しみがあつたでしょう。結局、夫の慰めの言葉はハンナの心の中の問題を一つも慰めてはいなかったのです。

ペニンナによるいらだたせとその攻撃の中に、ハンナの心は本当に傷つき、悲しみ、苛立ち、自分は本当に神に祝福されているのだろうか？と、さらに深く悩みの中に入っていました。そしてハンナは、自分に子供が与えられる！ということこそが、ペニンナから身を守る唯一の手段であり、また、神からの祝福を感じる絶対条件である！と確信をもって思うようになっていったのです。何が何でも子供がほしい！そういう思いに至ったのです。

しかし、これはある意味で、ハンナの肉欲と言っても良いことです。あるいは女性としてのハンナのプライドの問題だったかも知れません。いずれにせよハンナの中にある自分のための自分の欲の部分です。聖書には、確かに「胎の実は報酬」と記されています。また、創造の初めから、人間への祝福として「産めよ増えよ」と主が言ってくださっています。ですから、子供が与えられることは神の祝福の一つです。けれども子供が与えられていない者は、神の祝福がその者にはまったく無い！などということを聖書は記していません。それは大きな間違いです。主イエス様に罪赦され、病が癒された女性たちもいました。また神のために身を聖別した女預言者たちもいます。それはまさにその人への神からの祝福そのものです。ですから、(特に女性にはデリケートなことなので簡単には言えないことですが、)このハンナの何が何でも子供が欲しい！という悩みや、悲しみ、その思いというものは、冷静に考えれば、ハンナがここまで思いつめ嘆かなくとも、良いことだったかも知れません。

ところが神は、ハンナのそのプライドあるいは肉欲と言えるようなもの、さらにはその背後にあった時代背景という状況やその環境、そして自分に敵対するペニンナという人物さえも用いて、ハンナに祈る心を起こさせていたと言えます。そうして、ハンナは、はじめは強烈な自分の欲からの願いであったものから、次第に主の御心を求める祈りへと導かれて行ったのです。

そのハンナの祈りのクライマックスが9－11節です。

「シロでの食事が終わって、ハンナは立ち上がった。そのとき、祭司エリは、主の宮の柱のそばの席にすわっていた。ハンナの心は痛んでいた。彼女は主に祈って、激しく泣いた。そして誓願を立てて言った。

「万軍の主よ。もし、あなたが、はしための悩みを顧みて、私を心に留め、このはしためを忘れず、このはしために男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主におささげします。そして、その子の頭に、かみそりを当てません。」

そしてこの時のハンナの気持ちを15節で、「私は主の前に、心を注ぎだしていたのです。」とハンナは告白しています。ハンナは、ペニンナとの日々の生活と、また毎年訪れるシロでの礼拝を通し、ついにそのつる憂いが本当はなんであるのか、また自分自身も十分は理解していなかったであろうその正体を、主の前にすべて心を注ぎだす中で、自分自身が深く知り、また導かれて行ったのです。

これまでハンナは、礼拝に来ていながら、また神にいけにえを捧げていながら、その捧げたものにはいったいどれほど心が込められ、霊的な聖さがあつたのか、ほとんど分からないような信仰だったと思います。しかしその最後は、「何が何でも子供が欲しい…、絶対に子供が与えられなければ…、子供さえあれば…」という自分の欲のためではなく、「もし…はしために授けてくださいますならば…、お捧げします。」と告白しました。言い換えるなら、「主の御心ならば…、主の御用になるのであれば…、主のためならばどうぞお与えてください…」という信仰です。ハンナはどこまでも主の御心を願う祈りへと変えられていったのです！そしてそれが18節の最後にある、「彼女の顔は、もはや以前の様ではなかった」という、ハンナがようやく見つけた自分の心からの願いであった主の御心を求めることであったという中に、平安があたえられた。ということだったのではないのでしょうか。

さて、このハンナの祈りを通して、他にも大きな変化がありました。それはハンナ自身が、自分をいじめるペニンナに見せびらかすための子供として、神に子供を求めたのではなくなったということです。そうするとハンナのペニンナに対する考え方も、態度も変わっていったでしょう。もちろん一夫多妻という変わらぬ問題と苦しみはありますが、少なくともハンナの心は以前の様ではなかった。ということです。また、その後20節にあるように、実際にハンナには主から子供が与えられましたので、今度は、夫であるエルカナも、その子を捧げる信仰へと変えられていった。ということです。ようやくハンナとの間に与えられた子供なのに、その子を捧げるというのは、本当に難しいことだと思います。しかし、エルカナの信仰も変えられていった。ということです。このようにハンナの「心を注ぎだした祈り」とは、はじめはそれがあまりにも肉欲ではないだろうか？と自分自身も又は周りもそのように思えることだったかもしれませんが、しかし、それは次第に自分を見つめさせ、また自分さえも変え、そして周りの人々さえも変え、そうして神の御心を求める純粋な信仰の成長につながる祈りであったと言えます。言い換えるなら、もし私達が本当に心から祈るなら、その祈りを通して、神と格闘しつつも、自らの信仰が神の前に整えられていくのだ。ということです。ハンナの祈りにはそのことが表されているように思います。そしておそらくこれが祈りの本質だと言えるのではないのでしょうか。

神は、礼拝の中で、彼らが捧げたものをずっと見て来られました。それは、心が十分添えられていない、形だけの非常にお粗末な捧げ方でありました。それなのに、主はそれを受け入れてくださいました。そしてそれだけではなく、ハンナが神の前に本当に大切な自分の心のすべてを注ぎだすという、なにものよりも価値がる捧げものを捧げることが出来るようにと導いてくださり、それまで待っていてくださいました。そしてすべての出来事を神は用いて、ひとりのハンナという人物が、主の御心に叶った祈りを捧げるまでに導いてくださいました。そしてそこから生まれたのが預言者サムエルです。サムエルは、このあとイスラエルを導く預言者として大いに用いられていきました。こうした神の御計画がハンナの「心を注ぎだす祈り」の中にあつたのです。私達も神のみこころを勝ち取れるような心を注ぎだす祈りを捧げ、自分自身も変えられ、そして周りの人々をも変化させ、またこの国をも変えていくようなそんな御心に叶った心を注ぎだす祈りを主にあつて捧げさせていただきたいと願わされます。アーメン。

(参照箇所：Ⅱコリント 12:9, ルカ 22:32)